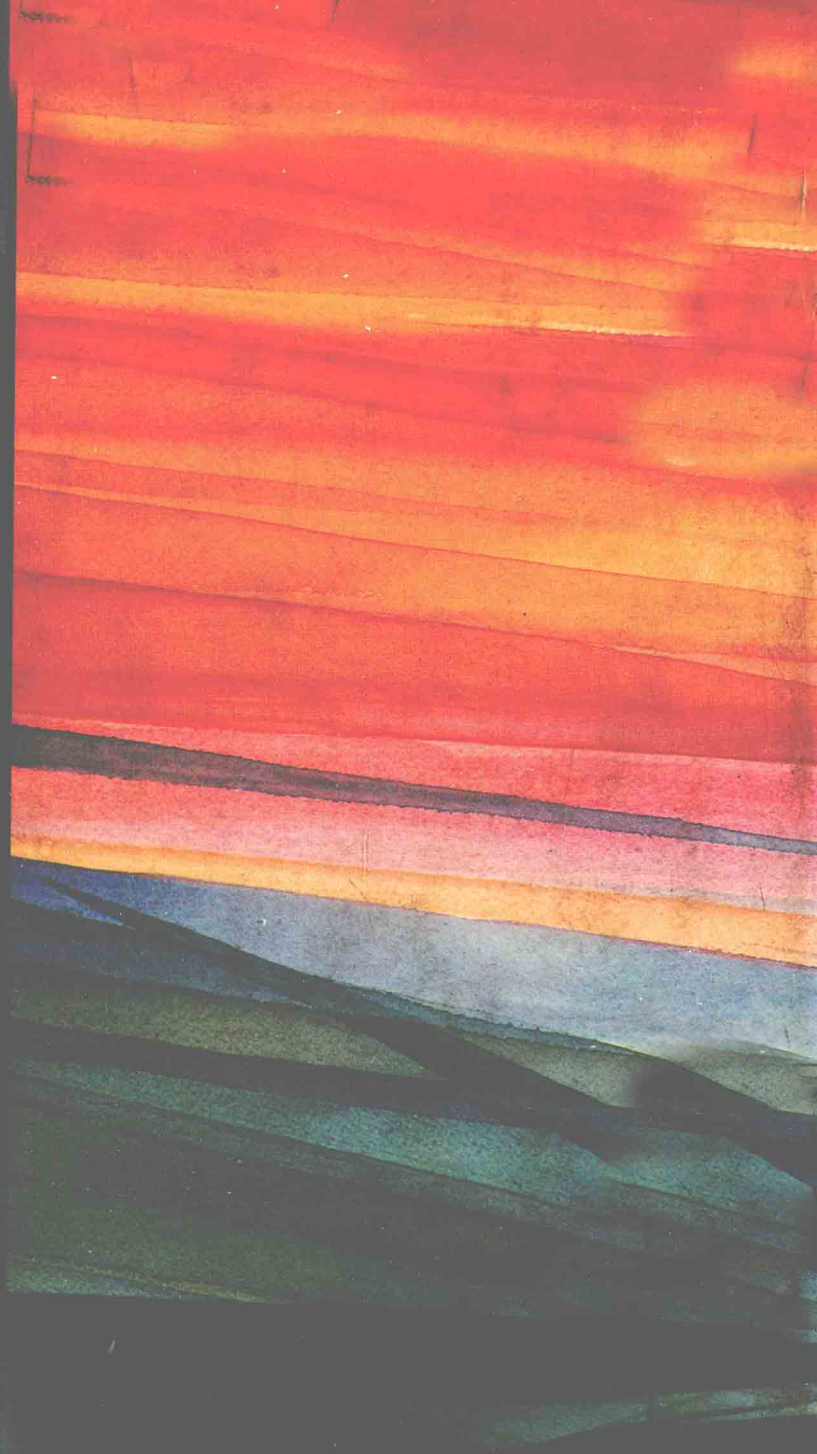


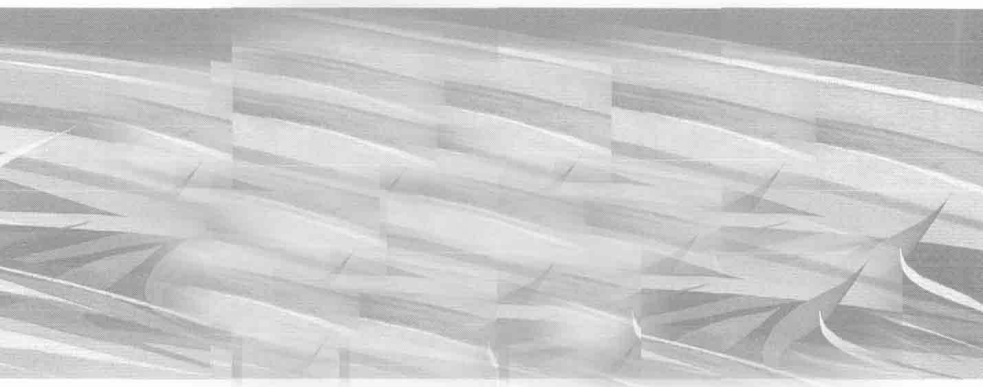
時代
(上)
瀬戸内晴美



愛の時代

(上)

瀬戸内晴美



愛あいの時代じだい 上

一九八二年一月二〇日第一刷発行

著者——瀬戸内晴美
せと うち はるみ

© Setouchi Harumi 1982 Printed in Japan

発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—四五一二三（大代表） 振替東京一三三〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一、〇〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にておとりかえいたします。

上
卷

目

次

紅椿	7
しだれ桃	31
牡丹	55
都忘れ	85
二人静	109
しもつけ草	136

てっせん

160

沙羅

181

白蓮

209

さるすべり

237

むくげ

259

ひおうぎ

280

愛の時代

上

装画・加藤 一
装幀・山岸義明

紅　椿

手さぐりで受話器を取りあげながら、怜子は枕元の時計を見た。闇の中に青白く光った夜光時計の針は、十一時四十分を指している。

こんな時間の電話は修策以外にはない。現金なほど、眠気の消えた声を送ると、思いがけず女の声が聞こえた。

「怜ちゃん、大変なことになったの」

怜子は一瞬とまどった。疳高い興奮した声が、一度だけ聞いたことのある修策の妻の声に似ていた。

「里佳が家出したのよ」

「ああ、お姉さんだったの」

「どうしよう、里佳が書き置きなんかして」

言葉の終わりの方は、泣き声で震えている。怜子は姉の和子の声を修策の妻とまちがえたわけをすぐ納得した。あの時の修策の妻も興奮しきって上ずっていたからだ。

そういえばあの時の修策の妻の年齢と、今の和子の年齢が、ほぼ同じくらいだったのも、とっさに思いかえされた。

「さっき、あんまり帰りが遅いから、里佳の部屋をのぞいてみたのよ。珍しく、とてもきれいにお掃除してあって、あの子のだらしないのは知ってるでしょ。おかしいと思って机の上を見たら、赤い薔薇を一本置いて、その下に書き置きがあるじゃない」

「何て書いてあったの」

「話したって無駄だから黙って出て行きます。大丈夫だから、心配しないで、私が連絡するまでじたばたしないで下さい……こうなのよ」

怜子は何だかおかしさがこみあげてきた。どうせノートの切れっぱしにでも横書きに書きとばしたのであろう里佳の筆跡が、目に見えるようであった。

「それだけ」

「そう、そして洋服や下着はたいいのものをちゃっかり持ち出してるの」

「大丈夫よ。服や下着を持ち出すなら命に別状はないわ」

「命に別状なんかあったたまるものですか。そんなことより、どうしたらいいのかしら、おとうさんは今、アメリカへ出張中なのよ。みんなわたしの責任になってしまう」

「しおりちゃんはいないの」

「アルバイトで、奈良へ行ってるの、帰りにあんだのところへ寄るって言ってたけど」

「昌彦さんはお休みじゃないの」

「春休みは帰らないっていつてきたの」

「じゃお姉さんひとりの時をねらったのね」

「そういうことね」

「最近、そんな気配があったの」

「気配も何もあるものですか。タケノコ族で踊りまわっていたのが、少し飽きたかしてやれやれと思ったところよ」

「里佳ちゃんがタケノコ族だったって」

「あら、いつてなかったかしら」

和子の口調は如何にもしまったという感情が滲み出ていた。

「へんなダン袋みたいな服ばかりつくって、駅のロッカーにあずけてあったのよ。まさかと思ったけど、知らせてくれた人がいて、見にいったら、里佳が踊っているじゃないの、あたしはもう、恥ずかしくて穴があったら入りたいくらいだった」

「テレビでしか知らないけど面白そうじゃないの、あれ」

「そんなこといつてる時じゃないわよ。里佳は本当にいなくなったんだから」

「でも、たぶん大丈夫よ。あの子はあれで案外しっかりしてますよ。きっと連絡があると思うわ」

「警察にはいわない方がいいかしら」

「二、三日待ちましようよ」

「あの子はあんたのことを好きだし、尊敬してるから、万一そっちへいったら、よくいいきかせて

ちようだい」

「わかったわ。もう今夜はウイスキーでものんでお休みなさい。あんまり興奮すると、血圧が上がりますよ」

「ほんと、もうさつきから胸はどきどきするし、頭はがんするし、二百くらいに上がってますよ」

まだいいたりないらしい姉の口調を封じるように、怜子は受話器を落としてしまった。

里佳にはいつから逢わないだろう。

去年の夏、友達と自転車で東海道を下ってきたといつて、京都へ寄った時が最後だったと思う。真っ黒に陽焼けして目ばかりきらきら光らせて、少年のようにすがすがしかった。長い髪をポニーテールにし、自分で描いたという漫画のボロシャツを着て、ショートパンツから細いぜい肉のない美しい脚をのびのびと出していた。

高校一年だといつていたから、この春で二年に進学する筈だ。

大阪に親類があるという友達と京都で別れて、怜子の家に三、四日いて帰京した。

怜子の家にいる間も、毎日ひとりで出かけていき、大原や嵯峨野を歩き廻って、およそ世話のからない娘だった。

かと思うと、怜子の仕事場に終日坐りこんで、珍しそうに機織台に怜子が織り上げていく紺の布を眺めて飽きるふうもなかった。

「里佳ちゃんも織物やってみる」

怜子が冗談半分に本気半分で訊いてみると、言下に答えた。

「だめ、里佳はとてもこんなこまかな仕事つづかないわ。浮気っぽいんだもん」

「浮気っぽいなんて、まだ里佳ちゃんの年で決められないでしょ」

怜子は、口もとと顎の線に、格別子供っぽいさの匂う里佳の顔を見直しながらいいかえした。

「うん、でも性格って、五、六歳で決まってしまうものなんでしょ。里佳はたぶんおじいちゃまに似たのね。隔世遺伝だってお姉さまもいってたわ」

「へえ、しおりちゃんがそんなこというの」

怜子は、姉妹とはいいいながら、およそ性格も顔付きも似ていない二人の姪の会話を想像してみた。

「そう、うちのおとうさまは生まれつき養子タイプで、あんなくそ真面目な面白くない人物でしょ。

放蕩三昧のおじいちゃまの血がたぶん、マアくと里佳に遺伝したにちがいないっていうのよ」

「あら、昌彦さんも浮気っぽいの」

「里佳ほどじゃないけど、多分に伝右衛門氏寄りじゃないかな」

里佳が顔もよく覚えていない祖父のことを、伝右衛門氏と呼ぶのもおかしかった。

初代の辻本伝右衛門は、近江の貧農の息子だったが、天秤棒一本で近江と江戸を往復し、一代で財をなした文字通りの立志伝中の人物だった。

文明開化の明治の新気流にす速く乗り上げ、横浜で貿易商を営んだのが当たったのだという。ラシャが主な商品だったが、鹿鳴館時代の紳士淑女の欧化一辺倒の装身具類も、一手に引き受けて輸

入っていた。

御殿と呼ばれる豪壮な邸や別荘を、麴町や大磯に造ったが、自分は死ぬまで家では木綿の着物で木綿の夜具しか用いなかったと伝説的に語りつがれている。

二代目伝右衛門は十七歳で渡欧し、毎月番頭から送られてくる充分な遊学費で、バリで王侯貴族並みの暮らしをして、勉強よりも放蕩を仕込み、三十歳を過ぎてようやく故国へ帰ってきた。

家業は初代に小僧時代から仕込まれた番頭たちや、姉の聲こゑによって守られていて、二代目の出る幕もない有様だった。

初代が晩年唯一の道楽にしていた蘭の花の温室の中で倒れた後、二代目伝右衛門の襲名披露の園遊会を、語り草になるほどの華やかさで行ったのを見て、辻本商会も三代までは持つまいと、客たちが囁きあったと噂されていた。世間の予想通り、二代目伝右衛門は政治に手を出し、晩年には、さしもの辻本家の財産も費いはたしていた。

長男と次男の二人が戦死したのに、すっかり氣落ちがして、晩年は横浜の孫のような情婦の部屋に入りびたり、脳溢血で息を引きとった時、肉親の誰ひとり、そこには居合わせなかった。

和子に迎えた啓一は、篤実な性格で、冒険も出来ないかわり、縮小した辻本商会を三代目ですぶすようなこともなく、手堅い守りの姿勢を押し通してきた。

西荻窪の邸と、千ヶ滝の別荘だけが残ったのを、番頭たちは、啓一の手柄のように認めていた。家付き娘らしく和子は性来おっとりとしていて、啓一との仲も波風も立てず暮らしてきた。和子の最近の心配事といえ、肥って血圧が上がってきたことと、昌彦が一年浪人したことくらいだっ

たが、去年から昌彦は北大へ入って落ち着いている。

末娘の里佳が中学時代から、得体の知れない言動をし始めたのを苦にはしていたが、学校の成績が下がるわけでもないで、こんな時代なのかとなかばあきらめていた。

まさか、いきなり里佳に家出されるなど考えてもみなかった。

怜子は、姉の三人の子供たちをそれぞれに愛していた。自分はおそらく子供は産まないだろうと思うにつけ、それぞれに個性の強い三人の姪や甥の成長ぶりに興味をそそられる。

ふだん一緒に暮らしているわけでないため、まれに逢うと、その目ざましい成長ぶりや変化に、目を見はらされるが多かった。

去年大方一年ぶりで逢った時の里佳の変貌ぶりも、目に鮮やかであった。

赤ん坊の時から目鼻立ちの整っていたしおりに比べて、里佳は色の白いのだけを取り柄など、和子を嘆かせる器量だった。和子もしおりも二重瞼の涼しい目もとをしていたが、里佳は初代伝右衛門ゆずりの目尻の上があった一重瞼が、女の子にしてはきつく、太い眉も大きな口もとも、可愛いがなかった。

子供っぽいピンクや赤の服が似合わないで、紺やグレーばかり着せられていて、お世辞にも可愛らしいとはいってももらえなかった。

幼い頃から気が強く、自分の意志が通らないと何時間でも、声がかれてしまうまで全身を震わせて泣きつづける。大てい和子が根負けして、里佳の言い分を通してしまうはめになった。

末っ子だから甘やかしていると思われるのが口惜しく、和子が時々思いだしたようにきつい顔を

見せても、一向にききめがなかった。

幼稚園の時から男の子を泣かしても、泣かされたことのない里佳は、小学校でも、中学でも、一番仲のいいのは、おとなしい男の子だった。優等生で世話のかからなかった上の二人に比べて、何から何まで勝手のちがう末娘に、和子はいつでも振り回されていた。

おとなしい昌彦と里佳が、替っていてくれたらというのが和子の口ぐせだった。

「怜子は去年里佳に逢った瞬間、

「まあ、里佳ちゃん、きれいになって」

と思わず口にしそうになった。陽焼けして目ばかり光らせた里佳の全身から、切りたての花のような瑞々しさがあふれていた。勢いよく水を吸いあげている花の精気のようなものが、少女の全身のまわりに光る層をつくっているようにまばゆい。

「いくつになったの」

「十五」

ぶっきら棒に里佳は答えた。

和子の電話があつて二日間、里佳からは何の音沙汰もなかった。和子は毎日、日に幾度も電話をかけてよこし、警察に頼まないでもいいだろうかと心配しきっている。少女誘拐の事件がいくつか報道されている世相でもあり、案じたらきりがなかったのだ。

「怜子も三日めは明け方里佳が、どこかの荒涼とした海辺をとぼとぼ歩いている夢をみたりして、胸騒ぎがした。都合によって、今日は上京して和子を見舞い、善後策を相談しようと心に決めた。